

パリ滞在日記抄

加瀬 幸喜

(法学部助教授)

1990年3月26日(月) 晴れ。

午後5時30分成田空港着。外からは何度か見たことがあるが、この建物の中に入るのは、今日が初めてである。両親や姉も見送りに来た。ぼく自身は、多少とも感傷的になっているが、子供たちは、売店で買ってもらった「ドラえもん」を一心に読んでいる。

8時過ぎ、出国手続きのために、エスカレーターで下へ。飛行機(KLM868便アムステルダム行き)は、予定より30分遅れ午後10時に離陸した。飛行機は、途中アンカレジ空港に寄り、14時間46分かかってアムステルダム・スキポール空港に到着した。現地時間3月27日午前7時46分である。まだ薄暗い。

パリ行き乗継便の搭乗券の交付をうけなければならない。飛行機を降り長いブリッジを渡って、搭乗券の交付をうけるための窓口に並ぶ。窓口には4つ列ができていたのだが、ぼくの並んだ列は、なかなか進まない。ぼくの前に10人程の黒人の団体がおり、どんな事情からかこの人たちへの搭乗券の交付が手間取っているからだ。ぼくの番がやってきたのは、8時25分であった。KLMパリ行きの乗継便の出発時刻は、8時45分である。窓口の女性係員は、「この便の切符の交付はもう閉鎖されたから、急いでC42番乗り場へ駆けて行くように」とのことである。搭乗券を持っていないのに、そんなことができるのかと不思議に思ったが、しかし、なにしろ駆けて行く身振りまでするものだから、その言葉を信じて乗り場に向かった。再び長いブリッジを渡って、C42番乗り場にたどり着く。係の女性に先ほど言われたことを告げると、当然であろう、「搭乗券を持っていない者は、乗ることができない」とのことである。窓口の係員はこう言ったと言ってもまったく取り付く島もない。しょうがないので、同じように言われた日本人男性と2人で先ほどの所に戻る。

まず搭乗券の交付をうけなければならない。先ほどの場所に戻ると、我々の乗って来た飛行機は遅れたため、同じように乗り継ぎに失敗した人たちが何人もいる。KLMの日本人女性職員が我々に詫びながら、飛行機の変更について説明する。彼女の案内で、1階下のKLMの窓口へ降り、そこで変更手続きを行う。また並ばなければならない。並んでいると、ぼくの前でもう時間だと言って、窓口が閉鎖される。KLMの日本人職員は、我々のために窓口の年配の女性職員と交渉するのだが、もちろんだめである。話には聞いていたが、な

るほどここはヨーロッパなのだということを実感する。しかし、それにもまして感じたことは、窓口の職員の日本人職員に対する態度である。とても同僚に対すとは思えない、高圧的で威嚇的態度は、なにを意味するのだろうか。勤務時間が終了したので、窓口を閉鎖する。当然のことをしたにもかかわらず、それに異議を唱えているから、毅然としてこれを排斥する、ということなのだろうか。もちろんそういう要素もあろう。しかし、それだけではないだろう。外国人である日本人職員への反発もあるのではないだろうか。つまり、同じ職員として自分と同じ側に立って顧客に対処すべきであるのに、日本人のお客の援助をする。これは、彼女の目には同胞へのひいきと映り、居丈高な態度となったのではないだろうか。

結局、13時05分発のKLM便に変更することができた。お残り4人組ができ、午前中カフェテリアで過ごすことにした。他の3人は、心理学専攻の女子学生、フランス語の教師、それに脳外科医である。女子学生は、春休みを利用してドイツに留学中のお姉さんに会いに来たとのことであるが、他の2人は1年パリに滞在する予定とのことであった。飛行機は、予定通りに離陸し、14時過ぎにドゴール空港に到着した。

15時過ぎに、リムジンバスで市内に到着した。パリはどんよりとした曇り空である。もちろん、初めてのパリである。通りの建物は絵のようであるが、装飾が多くぼくにはくどいような感じがする。

夜、Oさんに電話する。Oさんは、ぼくの大学の頃からの友人M君の友達で、フランス滞り10数年のベテラン選手である。明日会う約束をする。1年滞りするのだから、あわてて出歩かないように、注意をうける。

3月28日（水）曇り。寒い。

よく眠れぬままに目を覚ます。午前6時であった。窓の外は暗い。午前中日本人会へ行く。帰国売り・アパートの情報を探しにきたが、これはというような物件はない。

午後1時過ぎ、Oさんに会う。ホテル裏のカフェで話す。ぼくは、コーヒーとサンドウィッチを、Oさんはコーヒーを注文する。すると、注文しないOさんの分までサンドウィッチを持って来る。彼は、自分の分は注文していない旨を猛然と抗議する。ぼくはその様子を見てちょっと驚いたが、それが顔に出ていたのだろう、彼はこういう場合の対処の仕方を教えてくれる。彼が言うには、日本では謙譲的に控え目に話すことが美德であるが、フランスではそうではない、対等に時には高圧的にすら話さなければ自分の利益を守ることができないとのことである。彼は、ぼくよりも年上であるが、ぼくと話すときには、もちろん穏やかで控え目な物言いである。

3月30日（金）晴れ。

〇さんの車で、郊外のサンカンタン市に向かう。日本人学校がこの4月からサンカンタンに移転するからである。途中高速道路が混雑し、パリ市内から学校まで1時間以上かかった。学校の建物はまだ完成していない。とにかくパリから遠い。小2の息子はここまで通学できるだろうか。帰りに、〇さんとアパートを探す。郊外のブローニュ・ビヤンクールで2時間近く不動産屋を探す、それすら見つからない。歩道が石畳なので、足が痛くなる。ブローニュの森の北側のヌイイで不動産屋を探す。売買専門の不動産屋が多いらしく、3軒目にやっと賃借物件を扱う不動産屋に出会う。条件に合うアパートがある。しかし、今日は金曜日だから、その物件を見るのは来週の月曜日とのことである。

4月1日（日） 晴れ。

昨日オブニ（パリで発行されている日本人向けのミニコミ紙）のアパート情報を読んだら、16区で教師を希望する物件が出ていた。早速、電話をすると、今日見に来るよとのことである。約束の時刻に間に合うように、ホテルを出る。今日は天気がよいから、チュイルリー公園の中を散歩して、フランクリン・ルーズベルトからメトロに乗ることに決める。公園を散歩して気になったことは、埃っぽいということである。風で黄塵が舞上がり、歩道は舗装されていないから、靴が土埃で黄色くなった。これから他人の家を訪問するのにどうしようと心配になる。フランクリン・ルーズベルトからメトロに乗ろうと考えていたのだが、歩いているうちに、1つ先のジョルジュVまで来てしまった。ここからメトロに乗ったのだが、あわてていたので反対方向に乗ってしまい、約束の時刻に遅れそうになる。

アパートは、メトロのジャスマン駅のすぐそばである。家主は80数才の老婦人である。貸してくれるのは彼女の住んでいる部屋の一画なのだが、もちろん独立した風呂と台所が付いている。中庭に面して窓があり、中庭には小鳥が遊びに来ていて、なかなか感じがよい。4月17日まで、日本人夫妻が住んでいる。この方も有名なフランス語研究者であるが、この方の話にでてきた、この部屋に住んだことのある日本人は、皆さん有名なフランス語研究者のようである。

ホテルに戻り、〇さんに電話で相談する。言下に問題外とのことである。彼の言うには、あなたはフランス人のおばあさんとけんかができるような性格には見えない、子供がうるさいとかいう問題が恐らく生じるだろう、だからこの物件はよしたほうがいいとのことである。アパートは見つかるだろうか。

4月2日（月） 曇り。

午前11時、アパートの前で不動産屋と落ち合う。部屋は東向きで、近くにスーパーもあり、しかも家具が付いている。これを借りることに決める。しかし、難問が発生した。不

不動産屋が言うには、家主は今までに外国人に貸した経験がないから、家賃1年分を前納してほしい、また、日本の大学にファクシミリで身元を照会するので、その番号を知らせよとのことである。手持ちの金では、家賃1年分の前納は不可能である。こちらからは、家賃の半年分前納とT海上保険パリ事務所長が身元保証人になることを提案する。夜、日本の妻に電話し、大学のファクシミリ番号を聞くことと身元照会がある場合の対応を大学に依頼するよう話す。

4月5日（木） 晴れ。

アパートに入居することができる。結局、家賃の前納は求められなかった。ファクシミリで照会することもしなかったらしい。ただ、T海上のパリ事務所には、不動産屋から問い合わせがあったようだ。

Oさんがホテルまで車で迎えに来て、荷物をアパートまで運んでくれる。このアパートを見つけることができたのは、彼の献身的な助力のおかげである。直接の知り合いでないぼくのために、何度も時間を割いてくれ、感謝の言葉もない。

4月17日（火） にわか雨が降ったり、晴れ上がった。

10時頃、アパートを出てヌイイ市役所前にある警察署に行く。滞在許可証申請のためである。東京のフランス大使館で取得したビザには、入国後14日以内に滞在許可証を申請するように記されている。受付の20歳代の警察官に尋ねる。彼の言うには、ここは police national（国家警察）で、滞在許可証については、rue de pont にある commissariat（市警察署）へ行くようにとのことである。

Avenue du Roule を歩いて、大丸パリ店へ行く。大丸で米を買う。カリフォルニア米で約5kgで80フランであった。夜、先日買った電気釜で炊いて食べたらいいかった。日本の米より細長いが、目をつぶって食べたらいい感じと一緒である。

午後、commissariat へ行く。受付の女性は5番窓口へ行けと言う。列ができており、しばらくしてぼくの番になる。用件を係の女性に申し出ると、そばにあるポスターを指差し、滞在許可証の申請はナンテールの県庁で受け付ける、その番号に電話して面会予約をとるようにとのことである。まったく、なあんだである。このポスターを見るために、受付で尋ねさらに順番を待ったのである。ポスターと受付は10mほどしか離れていないのに、受付の女性はどのようにしてポスターに書いてある電話番号を教えてくれないのか。さらに、そもそもこの程度のことなら、午前中に行った police national の警察官が教えてくれてもよさそうなのに。これでは、オリエンテーリングのようである。

4月23日（水） 曇り。風寒し。

午前8時20分に家を出る。滞在許可証申請のために、ナンテールの県庁に出頭しなければ

ばならない。先日電話で申請日時を予約したら、今日の午前9時20分に来いとのことである。デファンスまで連結バスに乗り、ここで郊外鉄道(R.E.R.)に乗り換え1駅で降りる。

県庁に8時50分に到着。申請窓口は1階の一面にある。この建物の玄関にも2名の警察官がいたが、この部屋の入口にも警察官が2名立っている。部屋の中には、多数の黒人がいる。黒人たちは、口もきかずにじっとベンチに座っている。指定されている33番窓口に行く。そこには、すでにアメリカ人らしい人が立っている。この人が9時の予約なのだろう。9時過ぎに受付が始まる。日本の駅の切符売り場のようにガラス越しに係員と対面する。女性係員の我々に対する態度は、牛馬を扱うかのようなものである。こちら側に立っているのは、木か柱かでもあるように、申請者をまったく無視し、もっぱら隣の同僚とおしゃべりである。口の動く分、手の方はお休みがちだ。とても人間を応接している態度とは思えない。しかも今日は水曜日でフランスの学校は休日だから、係員の子供らしい10歳くらいの女の子が机の回りを飛び回っている。

ぼくの番がやってきた。申請に必要な書類を原本とコピーをそろえて提出する。先日県庁から送られてきた手紙に必要な書類が書かれていたが、その番号通りに書類をそろえているのだから、おそらく問題はないと思うが、それでも手続きが終了するまでは心配である。係員のおしゃべりにいらいらしたが、申請が受理され、写真を貼った申請受理証(仮滞在許可証)が交付された。正式の滞在許可証が交付されるのは、2ヶ月くらい先とのことである。やっと滞在許可証の申請が済んだ。パリに留学した人の話を聞くと、アパートを見つけることと、滞在許可証の申請が2大困難事のようなので、これで一山越したことになる。

用件が済んで、部屋の中を見回すと、黒人たちは窓口に並びもせずに、さきほどと同じようにベンチに座ったままである。この人達の順番は、午後なのだろうか。申請日時を予約する電話をかけたとき、国籍を聞かれたが、33番窓口は1番がアメリカ人で2番がぼくだった。先進国の国民を優先的に受け付けているのだろうか。